

## 2020年度「共同研究事業」活動概要報告書

### 実践研究課題：身近な生活課題に対応した小学校家庭科の授業づくり

和歌山大学教育学部 山本 奈美・今村 律子・村田 順子

和歌山大学教育学部附属小学校 静川 郁子

令和3年度近畿小学校家庭科教育研究大会 和歌山大会実行委員会

(代表：橋本市立学文路小学校 教頭 丸井 利恵)

#### 1. はじめに

小学校家庭科の研究グループでは、これまでに行ってきた附属小学校及び各地域の研究会との連携を今年度も継続させ、研究会ごとのテーマで授業研究に取り組んでいる。今年度を実施した内容として、附属小学校における授業研究と、来年度の近畿大会に向けて伊都地方技術・家庭科研究会が中心となって組織している令和3年度近畿小学校家庭科教育研究大会 和歌山大会実行委員会との取組について報告する。

#### 2. 活動の概要

##### (1) 附属小学校

衣生活内容のうち製作実習には多くの時間数が必要とされるにも関わらず、業者販売の作品製作キットが用いられることが多く、製作経験や作品完成の達成感だけが結果的に学習目的となりがちであった。学習指導要領の改訂により、「B衣食住の生活」の衣生活では、(5)生活を豊かにするための布を用いた製作の中で、内容の取り扱いとして「日常生活で使用するものを入れる袋などの製作を扱うこと」という一文が追加され、家庭科では従来にも増してさらに、思考力や判断力などを用いた問題解決的な学習を行っていくことが求められるようになった。このような背景をもとに、次のような連携を実施した。

##### ① 校内研究会「思いを形にして生活を豊かに」(9月11日)を位置づけとする連携

6年生の袋物の製作では、昨年度も探究的な学びとなるように、作りたい袋をイメージし不織布を用いてためし作りをし、袋の大きさを考えるという授業を行っていたが、今年度は一連の製作学習における学習目的を明確にし、それをさらに発展させた。その中で、「ゆとりと縫い代」および袋の種類(手提げ袋と巾着)を理解させて、製作キットを用いることなく、作りたい袋を子どもたちが製作する学習内容となった。校内研の前には他クラスの授業参観により、焦点化した授業をめざしたが、直近の1学期に製作したエプロンの作り方が子どもたちの頭から離れなかったため、三つ折りという布端の始末にこだわる児童が多く、それがためし作りの妨げになってしまった。

また、その後の製作学習授業にも複数回参加し、子どもたちがさまざまな布を持参し、思い思いに自由に作品を完成させていく様子を観察した。その結果、やはり製作するだけの授業から抜け出すことが困難であることや、児童が作りたい袋物製作には、小学校段階の技能を超えた内容を含んでしまうこと、さらにミシンの使い方が6年生秋でもまだ確実に身につけていないという問題点などを見いだした。

##### ② 冬の研究発表会「エプロンを作ろう」を位置づけとする連携

授業実践日：2020年12月16日(水) 協議会：2021年1月23日(土)

6年生による袋物の製作学習から派生した反省をもとに、5年生の製作学習のはじめに「布を知る」学習からスタートすることとなった。今回も授業実践日の前に、他クラスの授業を参観し、実践日の授業内容を共同で精査した。すなわち、作品の種類、布の学習のために比較する素材選び、またその素材の大きさ、観察項目等の取捨選択など多岐にわたった。観察項目および観察方法については、授業を参観することによって児童の発達段階や活動内容を確認することができたことから適したものを提供する必要性を実感した。さらに、児童の活動後の声かけ内容によって、授業内容が目標からそれないように工夫することが可能となった。

今年度はコロナウイルスへの感染防止のため、授業実践は前もってのビデオ撮りとなったが、そのおかげで協議会までに児童の振り返りノートについても共有することが出来た。子どもたちの授業理解の様子を確認してから協議会に臨むことは普段と異なることであったが、協議会への参加者との意見交換に役立ったと考える。エプロン製作やミシンの使い方などの内容は、この報告書を作成後の授業参観によって、次年度以降の教材研究につなげる予定である。

(2) 令和3年度近畿小学校家庭科教育研究大会 和歌山大会実行委員会と連携した学習指導案の検討  
伊都地方技術・家庭科研究会では、令和3年度に和歌山県で開催が予定されている近畿小学校家庭科研究大会の公開授業に向けて、研究会メンバーと大学教員が連携して授業づくりに取り組んでいる。地域の小学校で4つの内容を分担し、今年度はまずそれぞれの公開授業に向けた学習指導案の作成に取り組んだ。なお、この報告書を作成時点で学習指導案は検討中の段階であり、来年度の大会における公開授業に向けて活動を継続させる予定である。

以下、今年度の実施内容を示す。4つの内容のうち、もう1つの題材「工夫しよう！ベスト献立～学校農園の野菜を使って～(仮)」(橋本市立境原小学校)については、2月19日に学習指導案の検討会を予定している。

① A 家族・家庭生活 (橋本市立 恋野小学校)

題材名：恋野大好き！ぼく・わたしにできることを考えよう！～地いきの人々とのつながりを大切に～

検討会日時：11月27日(金) 場所：橋本市立 恋野小学校

小学校学習指導要領における「地域の人々との関わり」に対応した内容である。これまでの学校独自の取組である「三世代交流の集い」を家庭科での学習と連動させ、地域で生活する自分とは異なる世代の人々との交流を体験することを通して、生活における他者との関わり、地域で暮らす一員としての自己の存在を意識させることをねらいとして構想された題材である。検討会では、提示された原案をもとに意見を出し合うことで、「三世代交流の集い」の意義を家庭科の視点から問い直していくこと、総合的な学習の時間や道徳、社会科等での学習とのつながりを持ちながらも家庭科としての学習目標を明確にしていくことができた。

② B 衣食住の生活

題材名：ミシンでソーイング

検討会日時：11月12日(木)、11月30日(月) 場所：橋本市立高野口小学校

新学習指導要領において被服製作実習の題材に袋物が指定されたことを受け、ミシンを使った実習題材の検討を行っている。5、6年生における衣生活の製作題材の配置をどのように考えるか、

2年間を見通した題材の指導計画の作成が課題となり、それぞれの学校の実態を踏まえた題材の適時性について協議を重ねた。来年度の授業実施に向けて具体的な教材のアイデアを共有しているところである。3回目の指導案検討会を2月26日に予定している。

③ C 消費生活・環境

題材名：生活を支えるお金と物

検討会日時：1月19日（火） 場所：かつらぎ町立笠田小学校

近年の社会状況を踏まえ、より一層の指導の充実が望まれる題材である。提示された原案に基づいて、商品の選択のために消費者が必要とする情報に気付かせるための教材としてチラシが有効であるか、「チラシ」との表現が授業者の意図とは異なる受け止めをされないか、他に適切な表現はないか、身近な物の選び方の教材としてノートが最適かどうか、選択のための観点として何を設定するのが適当かなど、おもに教材と本時の展開の妥当性について検討を重ねた。今年度中に研究授業を実施し、その成果を踏まえてさらに改善に取り組む予定である。

3. おわりに

今年度は新型コロナウイルスに関連した感染症対策として、日常の教育活動のみならず、研究大会の中止や実施方法の変更など教員研修、授業研究の面でも大きな影響を受けた。このような状況にあっても研究会の場に呼んでいただき、共同研究としてともに家庭科の授業づくりと向き合う時間が持てたことに感謝申し上げたい。家庭科は「児童生徒同士が近距離で活動する」学習形態が多く、まだしばらくは授業実践においてさまざまな制約が続くことが予想される。一方で、「新しい生活様式」が求められる中であっても、人が生活するその本質そのものは大きく変わるものではない。生活すること、それを学習の対象とする家庭科の本質を改めて考えながら、児童生徒の今、そして将来を見据えた授業研究を継続させていきたい。